

## 経済学研究科課程博士号請求論文 審査要旨

論文題目：後期中世アラゴン王国の「パウロの身体」

提出者：桜井寛彰

### 1. 目次

本論文は、14世紀末のイベリア半島におけるアラゴン王国の社会分析を、斬新な視角から目指す意欲作である。目次は以下の通りとなっている。

はじめに

序論 後期中世アラゴン王国研究史：二つの流れ

第一章 アラゴン王国と東地中海

第二章 共存していた三つの集団の枠組みの検証

第三章 「ユダヤ人の改宗」の検証

第四章 「キリストの身体」と「パウロの身体」

第五章 アラゴン王権の神格化と「パウロの身体」

第六章 アラゴン王国の統治構造の変化と地中海

第七章 「パウロの身体」の内側の「新しい人」

結論

資料

### 2. 概要

本論文は、1492年コロンブスの航海をもって幕開けとされるヨーロッパ発の「近代世界システム」がいかなる事情で発動したか、その理由を、当時の社会構造と思想の両面から分析することを目標としている。それを主に動因解明研究として構想し、分析の主眼を、14-15世紀のイベリア半島における人間集団の物理的移動の問題、また、かかる事態を招来した社会的・思想的背景の問題と捉えて、分析を展開した。

桜井寛彰君は、1996年から2002年までジョーンズ・ポプキンス大学に特別奨学生として在籍し、途中、1998-99年度には、スペイン政府給費留学生としてバルセローナに滞在して、現地文書館での貴重な史料情報を蓄積してきた。この調査活動は、それ自体膨大な未刊行史料情報として結実し、それは、本論文でも巻末に貴重な資料紹介として配されている。本論文の魅力は、この地道な史料調査結果の整理と、斬新で魅力的な視角からのアラゴン王国社会分析、およびそこから導き出された新知見にある。史料解読の努力については、まずもって特筆に値する。研究対象とされた社会に残る資史料は、スペイン語（カステーリア語）、カタラン語、ラテン語、ヘブライ語、アラビア語など、多言語にわたって記されて、極めてポリグロットだからである。

さて、序論「後期中世アラゴン王国研究史：二つの流れ」では、アラゴン王国研究を直接の考察対象としながら、20世紀に展開した西欧社会研究の分析枠組について批判的検討が行われている。「近代社会」は、イベリア半島から世界規模大に展開した。C・P・ギンドルバーガー『経済大国興亡史 1500-1990』（岩波書店）や、P・ケネディ『大国の興亡 1500年から2000年までの経済の変遷と軍事闘争』（草思社）など一般的な概説書、啓蒙書に顕著に見られるように、この時代区分認識は、歴史研究者、経済史家にとっての前提的「事実」といってよい。この歴史区分と、画期前後における経済社会システムの相違、またシステム移行に関する研究は、19世紀以来、魅力ある一大テーマであり続けて

いる。世界史上の一大転機としてのこの「近代化」と「グローバル化」は、イベリア半島研究の有意性を担保している。本論文では、そのことを押さえた上で、アラゴン王国研究に伏流した近代史学の作法と認識枠組を批判的に検討する。桜井君によれば、この研究史には二つの潮流があった。すなわち、I. アラゴン王国は「キリスト教社会」「ユダヤ社会」「ムスリム社会」から構成されていたとする認識、またこれら三社会の構造に関する研究の潮流、II. アラゴン王国と東地中海に関する研究、である。

アラゴン王国社会が三つの社会集団から構成されたとする認識枠組には、直ちに反例が示される。本論文では、それを「浮遊した集団」としての「東方」から到来した「奴隷」*servus* 集団にとりわけ着目して、批判した。従来の社会構造論は、19-20 世紀的な「ナショナル」でドメスティックな分析枠組を基調としていた。本論文では、それを、地中海世界全体に視野を広げた人的交流の位相のなかに相対化し、分析枠組を東地中海をもカバーする広域的パースペクティブのもとに再設定する必要を主張した。

第一章「アラゴン王国と東地中海」では、以上の分析視角のもとで、東地中海世界にまで版図を広げた同王国の支配領域について注意が喚起される。6 世紀ユスティニアヌス帝期の帝国の再興によって到来した「ギリシャ人」。アラゴン王宮とビザンツ皇帝との婚姻関係。ビザンツ帝国の対オスマン戦力として招致したカタロニア人の東方植民と「ギリシャ人奴隷」のイベリア半島への移入。ビザンツ帝国末期のギリシャ人亡命者集団の到来、等々。これらの歴史的契機が、アラゴン王国内での東方「ギリシャ人」集団の存在を裏付ける証左として適切に指摘されている。

第二章「共存していた三つの集団の枠組みの検証」は、再び従来の研究史に立ち戻って、アラゴン王国社会分析を行う際の認識枠組みの再構築を試みる。それは、第一章でその実在が鋭く指摘された「東地中海世界からの流入民」( = 「ギリシャ人」 ) の、同王国内での役割を検討する作業工程上の前提として位置付けることができる。従来の 20 世紀史学は、同王国社会を構成する社会集団として「キリスト教社会」「ユダヤ社会」「ムスリム社会」という 3 つのサブ・カテゴリーを措定してきた。それら社会集団が、当時のアラゴン社会の通念において、いかなる枠組みのもとで認識されていたのか。「ギリシャ人」、またその宗教的指標から示される名辞としての「正教徒」が、同社会でいかなるかたちで認識されていたのか。本章での検証目標は、社会集団を認識する指標としての各種用語を諸史料上に検索し、そのコンテクストを分析することにある。一連の作業は、史料情報収集のための多大な努力と、極めてデリケートな文学的センスを要するが、桜井君の文書館での地道な努力は、本章以降の諸章で大きく結実している。

「東地中海からの流入民」の検出は、史料所言の解釈論レベルですでに可能であったが、本章では、各史料用語が示す実体についても考察が及ぼされている。多くの 20 世紀史学が措定した「キリスト教社会」は、アラゴン社会の多様な住民構成をいささか単純化して理解していた。Nova Christiana「新キリスト教徒」と表記される社会の実体も、正教徒ばかりでなく、ボゴミール派やパウロ派など東方教会において異端とされた者たちを含んでいたと考えられる。また、彼ら東方由来の「ギリシャ人」が、「サラセン」*saracen* と表記された実体に含まれうる可能性が検討された。「ユダヤ社会」にしても、13-14 世紀の諸史料には、種々の社会集団が表意されていた。例えば、そこには「タタール人」とされた集団からの改宗者も存在し、この「タタール人」カテゴリー自体にも「アルメニア人」が含まれる事例が確認される。

このようにアラゴン王国には、東地中海世界の人的要素が加わることで、多様で重層的な社会集団が混在していた、と結論される。本章での行論は、John Boswell など新世代の研究者の成果をも援用してはいる。しかし、少なからぬ史料と事例について極めてオリ

ジナルな考察を加えており、従来の三つの宗教・文化集団による認識枠を、説得的に論破することに成功している。

第三章「『ユダヤ人の改宗』の検証」では、1391年に起こったユダヤ人に対する暴動と、その後の強制改宗について検証する。この事件は、それまで、キリスト教徒とユダヤ社会との間で保たれていた「均衡」を崩壊させる契機と考えられてきた。Y. Baerをはじめとするスペインのユダヤ人研究者たちは、ユダヤ・キリスト教の対立の文脈で解釈を与えてきた。本章の学問的貢献は、これら研究史上のバイアスを指摘しつつ、13-14世紀の現実に新たな視点から迫り、整合的な説明を提起したことにある。

新しい視点の一つは「帝国の模倣」*imitatio imperii* 論である。「帝国」とは、当時の歴史現実に即せば、キリスト教化したローマ帝国、いわゆる「ビザンツ帝国」を指す。西方の諸王は、終末論に規定されて「世界の終わりの日まで続く地上最後の帝国」として君臨したこのビザンツ国家の皇帝との関係を模索し、帝国の分担統治者、ないしビザンツ皇帝に代わる代替統治者となるべく政治努力を展開していた。それは、アラゴン王ばかりでなく、メロヴィング朝、カロリング朝フランク王の昔からの政治伝統だった。

本章では、この改宗問題を、この「帝国の模倣」をモチーフとするアラゴン王の終末論的政治行動として理解するとともに、王国の東方進出との関連のうちに考察する。

「至福千年説」*millennarian* とは、神が6日間で世界を創造したように、世界は天地創造から六千年を経て最後の千年で終末を迎える、と考える西洋中世以来の思想である。それは、広くキリスト教世界に浸透していた。当時ビザンツ帝国を中心にキリスト教世界全域で用いられていた「世界暦」*anno mundi* は、西暦紀元1年が世界暦5508年に当たるとされた。つまり、西暦1391年は世界暦6899年であり、まさに最後の100年を迎える前夜であった（「近代」の幕開けとされる西暦1491-2年が世界暦7000年であったことは、あまり指摘されないが、重要な論点である）。「ユダヤ人改宗」問題も、この終末論的思想との連関を考えざるをえない。本章では、この観点から種々の史料上の事実が紹介される。いずれも事態を物語る貴重なエピソードであり、この史料事実の発掘自体、重要な学問的貢献といえる。もとより重厚な研究史を有する論題であるだけに、本章での考察は、不十分な考察に留まっていると言わざるをえない。しかし、思想状況と社会現実との接合を提起する姿勢は、重要な問題提起と評価されてよい。

続く第四章「『キリストの身体』と『パウロの身体』」、第五章「アラゴン王権の神格化と『パウロの身体』」は、アラゴン王国社会についての以上のような歴史認識にもとづいて、多様な文化・政治要素を包摂したこの社会の成員の統合原理について論ずる。「キリストの身体」*Corpus Christi*、「パウロの身体」*corpus mysticum di S. Paolo* という思想は、キリスト教の誕生によって、大きな歴史形成力をもつ原理として、アラゴン社会ばかりでなく、キリスト教を受け入れた諸社会に作用した。使徒パウロは、ヘレニズム世界に生きたユダヤ人であり、ローマ市民だった。パウロは、この重層的アイデンティティの体现者を踏まえた多文化要素統合の比喻として通念されていた。本章は、そのことを思想面から簡単に跡付け、この原理が、多様な社会成員を一つの社会に構成させる磁場として作用した、と論じた。

論文タイトルのキーワード「パウロの身体」を表題に含む本章は、いわば本論文の核心をなす部分である。わが国学界では耳慣れないこの用語に概説的紙幅を使わざるをえないのは仕方ないが、ここでの特筆すべき業績は、やはりスペイン各地の文書館で収集された豊富な史料情報が整理、紹介されていることである。かつて、ローマ人が奴隷を解放したことは、キリスト教ばかりでなく、地中海世界に見られた各種宗教の文脈のなかで「慈善」行為の一つと観念されていた。多様なオリジンとバックグラウンドをもつ社会成員を

統合する原理として、上述のように「パウロの身体」なる比喩が用いられ、各地で多彩な名称からなる「結社」が出現したこと、等が事例豊富に論じられている。この視角からのキリスト教社会分析は、これまでほとんど顧みられることがなかっただけに、本章は、その必要性を提起し、グローバルに展開する「近代化」の端緒としてのアラゴン王国研究を、その実態解明作業の代表として位置付けて実践した貴重な成果といてよい。

本章は、イベリア半島各地に痕跡を残す代表的「結社」事例に即して、史料にもとづき可能な限りの再構成を試みている。すなわち、「ユダヤ人の改宗者」による「結社」としてのアラゴン、バルセローナ（三位一体）、マンレサ、ペルピニャン（聖パウロ）、バレンシア（聖クリストバル）、マヨルカ（聖ミカエル）、また「ギリシャ人の解放」によって出現した「聖ニコラス」「聖ジョルディ」「精霊」といった事例である。事例研究をも含めて本章での一連の研究は、国際学界からも注目される重要な学問的貢献である。

第六章「アラゴン王国の統治構造の変化と地中海」では、社会統合の実態と原理に関する以上の王国内部の事情が、地中海世界に進出した王国の政治過程と密接に関連していたと論じられる。この部分は、アラゴン国家の統治機構の推移に関わる記述であり、既存研究のサーヴェイを基本とし、桜井君にとっては今後の展開を示す部分となっている。

第七章「『パウロの身体』の内側の『新しい人』」は、第四章、第五章で紹介された「パウロの身体」によって結び付いた人々の、現実の社会態様について紹介がなされている。ここでの記述は、アラゴン王国の社会史として興味深い実証研究を予感させるものとなっている。やはり各地の文書館から収集された事例を豊富に整理、紹介し、王宮や騎士から、宣教師や巡礼者として世界と往還した人物たち、職人や商業民に至る各種事例が言及される。「パウロの身体」思想の普及にとっては、書物に関わる人々の活動が大きな影響力をもったこと、またこれによってグローバルに展開する人間活動のデュナミズムが伝播されたこと、がとりわけ注目される。

### 3. 評価

15世紀に「突然」地球上への拡大を推し進めていったイベリア半島には、それに至る「中世」期において、種々の要素、要因が蓄積されていた。本論文の主目標は、事態を惹起した諸要素の析出、それら要素の実体確認作業、また各要素間の関係（関係性）の歴史形成論的説明、にあると言える。多様な社会要素を内包したアラゴン社会内部の統合の原理を、終末論的モチーフと結びつけて論じたことは、とりわけ本論文の核心に迫る重要な点であった。その作用によって、王国社会は、シチリアからペロポネソス地方までの地域を部分的に領有し、東地中海の人々をさらに多く受け入れていた。そして、これら広域、多様な人々の統合が「パウロの身体」の比喩によって各種結社を生み、その活動が王国のイベリア半島でのさらなる展開を推進していた。さらにはまた、これら諸活動の延長線上に、1492年に至るグローバルな拡散的展開があったと展望される。

イベリア半島のキリスト教世界が、現在に至る「グローバル社会形成」促進の原動力として、まさに先駆的役割を担ったことは事実である。本論文は、当時のイベリア半島で、かかる地球規模での律動を引き起こした政治的、経済的、文化的背景に鋭くメスを入れた点で、国際学界に対する貴重な提言となっている。主要な既存関連研究にも幅広く言及し、咀嚼している点も評価されてよい。多岐にわたる研究主題をクロスするテーマ設定であるために、この研究史サーヴェイ自体には、未熟な点が散見されはする。しかし、その苦勞を多としたい。同時並行で準備されている英文原稿は、欧米の出版社より刊行見込みとのことであり、より彫琢されたかたちで、近い将来、本論文の成果が国際学界に向けて発信されることと期待している。

ただ、本論文も、形成途上の若手研究者による論述であるために、当初難点が皆無というわけにはいかなかった。例えば、以下の諸点などは、なおいっそうの掘り下げが必要であったとして、審査員より指摘がなされた。

(1) 「パウロの身体」の定義、また史料所言の批判的紹介について。史料所言の単なる紹介に止まらず、その史料所言の社会的、文化的背景について解題を付すべきであった。この点は「ヘレニズム」についても同様のことが言えた。

(2) 20世紀半ば以降の学問世界が、アラゴン＝スペイン社会を論ずるのに、なぜ「キリスト教」「ユダヤ教」「イスラム」の3つを措定したかについての、知識社会学的考察。また、本論文がもつ研究史上の積極的意義・戦略について、さらに展開されてもよかった。

(3) アラゴンを考察対象とすることの意義について、他の地域・国ではなく、イベリア半島であることの説明が必要であるが、十分には展開されていなかった。

しかし、以上の諸点については、当人も自覚をしており、口述試験後に速やかに審査員一同の指摘に沿った加筆が得られたことを付記しておきたい。むしろここでは、上述の学問的貢献に対する積極的評価を強調しておきたいと思う。

研究を推進する上での桜井君の外国語読解能力の優秀さは、今後の作業展望とともに期待される特筆すべき点である。すでにその語学能力は、スペイン政府給費留学生として奨学金を得たことなどに示されていた。ラテン語、ヘブライ語に及ぶ史料読解能力はそれ自体特筆に値し、それらの能力をもって同君は、関連諸史料の精力的収集に努め、既存研究者の成果を積極的に吸収してきた。一連の考察の結果、これまで問題関心が希薄であった「東地中海からの「ギリシャ人」流入者」の歴史的意義に注目するに至ったのであり、国際的にも注目される本論文の記述に結実したことを喜びたい。

<概要>において示したように、本論文は、スペイン王国の前身であるアラゴン王国が「東方」との交流を積極的に展開したこと、これに対応して東方からの「ギリシャ人」集団が同王国社会に多く移住し、多彩な活動を展開したこと、この活動が人の移動を活発化させる原動力となったこと等を、実例豊富に検証した。「近代」の幕開けをもたらしたアラゴン王国社会内でのデュナリズムがこのように多面的、説得的に分析されたことは、わが国ではもちろん初めてのことであり、国際学界に対しても大きな貢献を含む貴重な成果と考えられる。本論文での分析は、大西洋を越えて展開したこの「近代社会」の母胎に関して国際学界でも稀な視点からなされており、多くのオリジナルで貴重な提言を含むものとして、今後大いに評価されることと期待している。

以上の理由から、桜井寛彰君による本論文が、一橋大学博士（経済学）の学位を授与されるに十分相応しい水準にあるものと判断する。

2004年3月10日

審査員	藤田幸一郎
	加藤 博
	池 享
	江夏 由樹
	大月 康弘